

## 素材の賞味期限について（2）

2015.11.3 NIMS 篠原嘉一

前回に続いて「素材の賞味期限」ですが、今回は、日本人の二面性について少し紹介いたします。この二面性は「建前と本音」と表現されることもありますし、「理性と感性」ということもできます。「本音」や「感性」の部分は、土居健郎氏が「甘えの構造」として本に著わしたこともありますし、山本七平氏はそれらの相互作用を「空気」とも表現しました。若者ことばの KY は「空気が読めない」の略です。

この感性は日本人に固有のもので、自然という同心円の中に人間を位置づける特有の自然観を発達させたようです。人間と自然の間には一神教のような契約関係や上下関係がなく、人間は自然の中で生かされる存在という自然観です。このような自然観は一般的に文明が未発達時代に共有されるもので、普通は文明化と共に失われていくそうですが、日本人は現代社会においても堅持しています。

日本人はこの二面性によって物事を多面的に理解しようとします。近隣国のように決して極端に走らずに中庸を旨としています。日本では二大政党制が成立しないのはもっともな話です。二つの大きな政党ではなく、日本人の二面性に立脚した主要政党と、そうでない小規模政党という図式が一般的なようです。争いがあっても双方の言い分を聞き入れ、杓子定規でない大岡裁きに人気があります。逆に駆け引きは下手なようです。

理性と感性の両方にうまく働きかけること、これができないと日本の社会や消費者は動かないように感じています。理論やデータを駆使した理詰めの個々の議論を理解することはできても、日本人や日本社会や自然との本来的な相性の良さを感じ取れないと、なかなか行動には移れないようです。理性は教育によって身につくものであるのに対して、感性は日本という風土で日本語を話して生活することで育まれるものと思われます。日本人とは、感性という体に理性という服を着ている存在と理解してよいのではないのでしょうか。

いくら頭でエコを理解できても、理性ではこうすべきだと考えられても、感性で受け入れられなければ動かない、「分かっちゃいるけど止められない」のです。理性的に映る LOHAS や ETHICAL が日本で直ぐには流行らないのは、そのためなのでしょう。

欧米では理性のエッセンスであるサイエンスや学問が、そのまま社会と結びついているのに対して、日本では余りうまくいっていません。日本で、基礎研究→応用開発のリニアモ

デルが成立していないことを見ても明らかです。このことは、NIMS 前理事長の岸さんの嘆きでもあります。

日本が持続可能な社会を目指す場合に、理性のみに基づいた「絵に描いた餅」は計算された綺麗なポスターであって、実生活では直ぐには役に立っていません。統計データや計算予測は感性に響かないようです。理性で何事も判断して行動することに憧れはありますが、やはり、理性は身に纏っている服なのです。理性という服を着た感性、これにアピールすることが日本人には不可欠のように思います。

日本人の感性に上手く働きかけている表示が、食品の賞味期限でしょう。次回は賞味期限について具体的に紹介します。